

子育て支援セミナー

7月13日(水)～15日(金)の3日間、本学において子育て支援セミナーを実施しました。168名(大人81名子ども87名)もの参加があり、明るく活動的で、笑顔あふれる催しとなりました。

内容は、昨年度から引き続き実施した、「音楽遊び」や「講演『子育て支援の心理学』」に加え、「親子遊び」「運動遊び」「製作遊び」「子育てアドバイス」と本学教職員が工夫をこらしたものでした。また、「パネルシアター」や「音付き絵本」、「小麦粉粘土遊び」など、学生たちによる交流活動も実施しました。

(守川美輪)

参加者の感想をいくつか紹介いたします。

- とても楽しかったです。他のお母さん方とたくさん話して、同じような悩みを持っているのだなと少し安心しました。
- クレヨンを握ること、楽器に触れることも初めてのことでよかった。
- 学生さんたちがにこにこ元気に子どもと関わってくれて嬉しかったです。
- 子どもの行動の理由が分かり、余裕を持って接することができる気がします。(講義を聴いて)

スタッフとして参加した学生の感想をいくつか紹介いたします。

- 実際に子どもたちと触れ合えて本当に楽しかったです。2ヶ月の赤ちゃんから4、5歳児まで様々な年齢の子どもたちと接することができました。
- パネルシアターを子どもたちが喜んでくれてよかった。上手く演じることができました。
- 参加して、企画することの大変さと大事さが分かりました。



宮崎学園短期大学 保育研修会

本年度第1回の「保育研修会」を7月24日(日)に本学で開催しました。

午前中は池田敦子准教授(音楽科)のピアノと佐々木昌代准教授(保育科)の身体表現による『音と動きで遊ぼう』、午後からは守川美輪准教授(保育科)による『(製作)カラフル!』が行われました。参加された幼稚園・保育所の先生方は、毎日保育現場で活躍されているだけあって、生き生きとした動きと見事な手際で、どの活動も楽しまれました。第2回は11月27日(日)に行います。

(保育研修会担当 中武亮子)



学生の就職活動状況(就職指導課)

昨年度同様に厳しい就職戦線となっております。来年度も、このような状況は続くと思われる。厳選志向の強い状況では、1年次からの筆記試験対策などの準備が大切なので、就職模擬試験を大いに利用して欲しいと思います。

ネットによるエントリーや企業説明会への参加、短大やハローワーク求人への応募等から、就職活動を活発に行っている学生がいる一方で、未だ受験したことのない学生もいます。

就職は自分の事です。自ら積極的に動かないと内定を得ることはできません。内定を得るには、それなりの努力が必要です。就職活動に最も必要な事は、積極性と忍耐力、そして明るさです。これからも、前向きに活動し続けていただきたいと思っています。

(就職指導課長 佐土原敦)



宮崎学園短大フェスティバルのご案内

今年も短大フェスティバルの季節がやってきました。本学で展開されている教育内容を広く県民の皆様へ紹介すると共に、教育的な遊びを通じて皆様方のお役に立ちたいと下記の通り開催いたします。皆様方のご来場を心からお待ちしております。(実行委員長 河野 包)

- | | |
|---------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 保育科 | ●10月22日(土) 10:00～15:00 本学交流センター ●12月3日(土) 10:00～15:00 イオンモール宮崎イオンホール
親子あそび・エプロンシアター・ゲーム・製作・運動あそびなど |
| 初等教育科 | ●12月11日(日) 10:00～14:00 イオンモール宮崎イオンホール
わくわく☆キラキラ☆シアター・読み聞かせ・アニメヒーローと遊ぼう *クッキーのプレゼントもあります。 |
| 音楽科 | ●10月29日(土) 13:30～15:30 大坪記念ホール
・第1部 学生による演奏 ・第2部 ミュージカル「ぞうれっしゃがやってきた」 |
| 人間文化学科 | ●12月11日(日) 10:00～14:00 イオンモール宮崎イオンホール
医療用語クイズ・健康チェック(血圧測定など)・ヘルス&マナー講座 for children
おもしろ写真作り・書の展示 *お茶・お菓子も用意しています。 |

発行●宮崎学園短期大学後援会 発行責任者●前田 澤

宮崎学園の財務状況を本学ホームページに公開しております

10 後援会だより



October 2011 Vol. 16



保育科1年生 球技大会

学長所感

あなたもエライが、 私の子供もエライ

学長 山下 忍



やること、為すことで、三日坊主に終わることが多いのに、これだけは日々楽しみにしながら、大方10年近くにわたって継続しているものがあります。

何も大仰なものではありません。身近かなところに掛けてある日めくりを、毎朝早くにわが手でめくり、その日その日に記されている言葉をゆったりと眺めるというだけの行為です。ここ数日で目にした言葉は、「大丈夫!いいことあるよ、きっと」、「あなたもエライが私もエライ、今日は私をほめることにしよう」、「一生のうちひとつでも多く便りをしよう」、「ゴミをひろう、心のゴミがひとつ減る」、そうしたものでした。

〈継続は力なり〉の実践といっても、それだけのことかと思われるかもしれませんが。

しかし、新たな一日を、その日その日にめくり出し、そこに書きそえてある言葉を、なるほど、そうか、そうか、とうなずきながら見つめるというのは、早朝の行為としてはなかなか乙なもの。三日坊主が10年も続けているのですから、幾らかの存在価値はあるはずだと、自分勝手に思っています。

ところで、「学長折々の記」(その26)にも記したことで、今年の夏季休業中にも、様々な感動に接することができました。吹奏楽部や合唱団の大活躍、来学した高校生に大きな思い出を生み出したオープンキャンパス、宮崎市民に、宮崎学園短期大学はよく頑張っているねと評価していただいた「えれこっちゃんやざき市民総おどり」への参加、そして、初等教育科の現2年生や卒業生が見せた教職採用試験での見事な成果。高きを望めば、もっとももっと、思うところはありますが、私は、宮崎学園短期大学の学生諸君は、ほんとに偉いと思っています。本学学生には、やるべき時には、苦勞をいとわず、笑顔浮かべてしゃっきりやり抜くという生き方が、随分と身につけていると思うのです。ほめ過ぎでしょうか。

それでも私は、保護者の方々は、時には、「あなたもエライが私の子供もエライ、今日は私の子供をほめることにしよう」と、思いっきり、わが子をほめちぎっていただてよかろうと思っています。

「今、学生が努力していること」

保育科

夢を追い、子どもとともに輝くこと

保育科長 野坂 敬

「子どもが好き」、「子どもに関わる仕事がしたい」と保育科に入学し、高校時代と異なる授業スタイルや内容に戸惑いながらも、新しい仲間たちとの出会いで新しい自分を見つめ、忙しく自分を追い求めてきた新1年生。入学からの半年の間に、「春の忍が祭」等で先輩たちと触れあい、夏休みには保育園訪問やボランティアを経験しました。これらを通して「目標」を身近に感じるとともに「安堵」や「不安」で揺れ動きながらも、自分の夢をしっかりと見つめ、それぞれの思いの中で「本当の自分」の輝きを発揮するべくあらゆるものを吸収しようと頑張り、ようやく保育科学生となりつつあります。2年生に目を転じると、各種の実習を経験し、一年時と違った落ち着きと、自信の表情の姿を見ることが出来ます。現在、就職活動が進む中で自身の「保育士(者)」としての姿や、人生のスタートに真剣に向かい合っただけで自分が一番輝く場所を求めて頑張っている姿に、二年生の大きく成長した「輝き」を感じ取ることが出来ます。さらに、保育科を卒業し、もう一年間介護福祉を中心に学びを深めてきた専攻科福祉専攻の学生については、様々な実習や体験を通して、自分の適性や弱みをより理解し、将来の姿をしっかりと描き、一歩一歩を確実に歩んでいる姿に出会います。専攻科での半年がこれほどまでに成長を促し、保育科時代とは違った落ち着きや、頼もしさを感じさせることに感動を覚えています。

保育科の伝統は、「子どもが好き」だからという漠然とした「保育士(者)感」から、「理想の保育士(者)像」を確立し、悩みながらも「いますべきこと」をしっかりと理解し、努力を続け、結果として、夢を叶えて、「保育士(者)」として、多くの保育等の子育て現場で輝く先輩諸氏が沢山いらっしゃることに現れていることです。こうしてみると保育科学生にとっての努力とは、将来の自分の姿をみつめ、日々の輝きを強めていく毎日の姿でありましょう。



初等教育科

未来を切り拓く

初等教育科長 松野 隆

初等教育科では人間性豊かな教育実践力を持つ小学校教員と幼稚園教諭の育成を目指しています。卒業までには2年間ありますが、小学校の教員採用試験は2年次の7月・8月に実施されます。幼稚園の採用試験は宮崎県の幼稚園教諭登録試験が8月に、また、園ごとの採用試験が随時実施されるという状況で、実質的には1年数カ月で就職試験に臨むことになります。限られた時間を有効に活用するため、学科では様々な取り組みを行っています。

その中で、今年も夏季休業中に行われたのがサマースクールです。サマースクールとは、夏休みに小学校などで行われている補習的な取り組みのことです。本学では、数年前から清武小学校を中心としたサマースクール事業に参加させていただいております。各学校の先生方が行っている夏休みの宿題や1学期の復習、発展的な学習などの指導のお手伝いを学生がボランティアという形で行います。

サマースクールは教育実習と同様に、学生にとって子どもと触れ合う貴重な機会となっています。始めは戸惑いもあったようですが、3日間の経験を通して、様々な発見や学びがあったようです。このように学生たちは、正規の授業や実習はもちろんのこと、教職課外講座やサマースクールの参加などを通して、教師としての資質を向上させ、社会人としての基礎力を身につ

けるべく、努力を重ねています。

今年度の教員採用試験は終わりましたが、1次合格者は2次に向けて、本学において開催している教職課外講座などを通じ個別指導を受けたりするなど、積極的に学んでいます。また、今年度不合格だった学生も、すでに来年度に向けて勉強を始めています。一般就職や公務員を目指す学生もそれぞれに課題を持って取り組んでいます。私たち教員はその頑張りにはできる限り丁寧に応えていきたいと思っています。

最後になりますが、教職課外講座に本学後援会よりご支援いただいておりますことに厚くお礼申し上げます。



音楽科

青い夏空に音が舞う！

音楽科長 末平 浩康

夏になると、コンクールシーズンというのが定番化しつつあります。吹奏楽コンクール、合唱コンクール、そして、それぞれの専門を競い合うピアノや声楽や各種の楽器のコンクールがそれぞれです。今年も、音楽科学生を中心に、短大生が大活躍をしました。夏の暑さをふっとばすような澄み切った、さわやかな音空間を繰り広げてくれました。

吹奏楽部は、井手茂郎教授指導の元、県大会を見事トップの金賞で、九州大会出場を果たし、8月末に行われた九州大会で銀賞を獲得しました。全国的にみて、短大生がこのような活躍していることは、まさに特筆すべきことなのです。4年制大学では、40人から50人の部員を集めることはたやすいことですが、短大となると、30名ですらなかなかです。しかも大所帯ばかりの演奏を凌いで金賞を獲得することは絶賛すべきと言えましょう。音楽は、人数や音量だけではないという証左です。いかに、凝縮された音色、音質、音の魂がコミュニケーションされるかが勝負なのです。

合唱団も例年通り頑張っております。8月初旬に行われた県大会で、もちろん金賞受賞、特別賞の渡瀬杯を併せて受賞しました。今年は、九州大会が10年ぶりに宮崎市で開催されます。是非九州代表の権利を獲得して全国大会出場を果たしてもらいたいものです。

個人のコンクールにも多くの音楽科生が挑戦しました。宮崎ピアノコンクールでは、研究生の鳥越実咲さんが見事優秀賞に輝きました。宮日コンクールにも数名が挑戦しましたが、今回は予選突破をすることができませんでした。コンクールは結果だけを求めるものではありません。自分のありのままの音楽の姿をさらけ出し、生きた音として審査員に伝えることなのです。決して最終の目的ではないのです。そこを間違ってしまうといけません。コンクールを一つの過程として捉え、説得力ある音楽作りと基本に立ち返ってこそ、もうそこに来ている芸術の秋につながるのかもしれない。秋の空はもっと、いい音を吸い上げてくれそうですね。



人間文化学科

決してあきらめない

人間文化学科長 久保 良一

今年の日本は、未曾有の大震災、また、小惑星から7年ぶりに地球に帰還した「はやぶさ」、ワールドカップ女子サッカーの優勝など色々な出来事があった。ここにはいずれも、「決してあきらめない」という長年培われた日本人の強い精神力と言うかまた「品格」と例えても過言でないものが横たわっているものを感じる今日この頃である。「はやぶさ」も映画化され、それを宇宙で滞在している宇宙飛行士、古川 聡氏は、日本人に対してあきらめない心で「はやぶさ精神」に賞賛の言葉を贈っている。

私達の人間文化学科も日頃の教育活動の中で、「決してあきらめない心」を持って努力している姿がある。例えば、7月に夏季オリエンテーションを開催し、学科出身の卒業生を招聘した時の「聞く、話す、書く」の態度には身震いをするほど最後まで完璧であった。さらに、分科会での質問するマナーの良さを見るたびに「すごいぞ」と声を掛けたい。また、1年生全員で訪れた「安井息軒記念館」での説明を聞いている態度もすばらしかった。一方、2年生では就職試験に努力している姿がある。「どうですか」と声を掛けると笑顔で「がんばっています」という返事が返ってくる。これらの行為は、日頃の学習や生活態度等の中で自分を高めようとする「強い意識」の現れではなかろうか。そこに感動を覚えるのだろうか。

学科生の姿を日頃から見ていると、その日、その時でも言動や行動など一刻一刻変化している。人間関係、学習に悩み、自分との葛藤、また逆に事が達成された時の笑顔は、何ともいえないすばらしさがある。これらに接するたびに私達、教員も「決してあきらめない」教育を展開していかねばと再決意する日々である。

